2025.05.17

第 69 回国際東方学者会議
SymposiumⅢ：中国文学における感情史の構築

# 漢代宴席文芸に流れる基盤的感情 ―曹植「鼙舞歌」を通して―

県立広島大学名誉教授　柳川順子

漢代の宴席で行われた芸能のひとつに「鼙舞歌」がある。この舞曲歌辞は伝存しないが、当該歌辞に基づいた、魏の曹植による「鼙舞歌」五篇（『宋書』楽志四）を通して、そのおおよその姿を復元することができる[1]。では、その漢代宴席文芸に流れる基盤的感情とはどのようなものか。本発表では、曹植の前掲作品の中から「精微篇」「霊芝篇」「聖皇篇」の三篇を取り上げて、当時の人々が広く共有していた普遍的感情の一端を掬い上げてみたい。これは、中国古典文学の研究に、感情史という新たな視点が何をもたらし得るか、その可能性を提起しようとする試みでもある。

## Ⅰ.「精微篇」（漢代「鼙舞歌・関東有賢女」に当たる）に詠じられた勇敢な女性たち

01 精微爛金石　　精妙なる精神のはたらきは金石をも煮崩れさせ、
02 至心動神明　　真心は神明をも動かす。
03 杞妻哭死夫　　杞梁の妻は亡くなった夫を哭し、
04 梁山為之傾　　梁山はそのために傾いた。
05 子丹西質秦　　燕の太子丹は西のかた秦国で人質となり、
06 烏白馬角生　　彼の帰国への強い希求が、烏を白くし馬に角を生じさせた。
07 鄒衍囚燕市　　鄒衍は燕の市場にて無実の罪で捕らえられ、
08 繁霜為夏零　　身の潔白を思うあまり、びっしりとおいた霜が夏の零となった。」
09 関東有賢女　　関東に賢明なる娘がいて、
10 自字蘇来卿　　自らその呼び名を蘇来卿としていた。
11 壮年報父仇　　壮年となって父の仇敵に報復し、
12 身没垂功名　　その身は没しても、功名を後世に残した。」……①
13 女休逢赦書　　秦家の娘の休が、恩赦の文書に巡り合ったのは、
14 白刃幾在頸　　白くきらめく刃がほとんど彼女の首に置かれたときであった。
15 俱上列仙籍　　ともに天上に昇って仙籍に列せられるところだったが、
16 去死独就生　　死から逃れ去り、ひとり生き延びることとなった。」……②
17 太倉令有罪　　太倉の令に罪過があり、
18 遠徴当就拘　　遠くから呼び出しがかかって拘束されることとなったとき、
19 自悲居無男　　自ら悲しんだ。家には息子がなく、
20 禍至無与俱　　禍がやってきても、ともに対処する者がいない、と。

[1] 詳細は、柳川順子「漢代鼙舞歌辞考―曹植「鼙舞歌」五篇を媒介として」（『中国文化』第 73 号、2015 年）を参照されたい。

21 緹縈痛父言　娘の緹縈は父の言葉をひどく悲しみ、
22 荷担西上書　荷物を背負って西のかた長安へ赴いて上書した。
23 槃桓北闕下　宮殿の北闕の下を行きつ戻りつして、
24 泣涙何漣如　なんとさめざめと涙を流したことか。
25 乞得并姉弟　願い出て、姉妹ともに、
26 没身贖父躯　その身を官に差し出し、代わりに父の身体を贖うこととなった。
27 漢文感其義　漢の文帝は彼女の義に感じ入り、
28 肉刑法用除　肉刑は法的処分から除かれることとなった。
29 其父得以免　その父はこれによって無罪放免を得ることができ、
30 辨義在列図　義を理路整然と説いた緹縈は列女図に描かれている。
31 多男亦何為　息子が多くてもまた何の役に立つものか。
32 一女足成居　ひとりの娘で十分に家を守り抜くことができたのだ。」……③
33 簡子南渡河　趙簡子は南のかた河を渡ろうとしたところ、
34 津吏廃舟船　渡し場の吏員が船を出すことができなかった。
35 執法将加刑　法を執行してこれに刑罰を加えようとしたところ、
36 女娟擁櫂前　娘の娟が櫂を抱いて前に進み出て言った。
37 妾父聞君来　「私の父は、殿様がいらっしゃって、
38 将渉不測淵　　これから不測の淵を渡ろうとするのを聞きまして、
39 畏懼風波起　　波風が起こるのではないかと懼れ、
40 祷祝祭名川　　お祈りをして名川を祭ったのでございます。
41 備礼饗神祇　　十全な祭礼を執り行い、神様をもてなしまして、
42 為君求福先　　殿様のために幸先よろしきを求めたのですが、
43 不勝醻祀誠　　酒杯を飲み干して祭りたいとの誠心に堪えられず、
44 至令犯罰艱　　厳罰に値する罪を犯すこととなってしまいました。
45 君必欲加誅　　殿様がもしどうしても誅罰を加えようとなさるなら、
46 乞使知罪愆　　どうか、その罪状を父に教えていただけませんか。
47 妾願以身代　　わたくしは父の身代わりになりたいと存じます。」
48 至誠感蒼天　彼女の真心は蒼天を感じ入らせた。
49 国君高其義　国君は彼女の義を高く評価し、
50 其父用赦原　その父はこれによって釈放された。
51 河激奏中流　「河激」の歌が流れの真ん中で演じられ、
52 簡子知其賢　それを聞いた趙簡子は彼女の賢明さを知った。
53 帰娉為夫人　帰国して、彼女は娶られて趙簡子の夫人となり、
54 栄寵超後先　その栄誉と寵愛は、後にも先にも比類を見ないものだった。
55 辯女解父命　弁舌に秀でた娘は、父の命運を解放した。
56 何況健少年　まして健やかなる少年たちにおいてはなおさらだろう。」……④
57 黄初発和気　黄初の今、世の中には和やかな気があふれ、
58 明堂徳教施　明堂からは徳ある教えが敷き広げられている。

59 治道致太平　　治世の道は天下泰平をもたらし、
60 礼楽風俗移　　礼楽によって民の風俗はよき方向へと導かれている。
61 刑錯民無枉　　刑罰を施す上で、民が冤罪に陥れられることもないので、
62 怨女復何為　　怨女たちもまた何をすることがあろうか。
63 聖皇長寿考　　聖なる皇帝陛下には長寿であられますよう、
64 景福常来儀　　大いなる福がとこしえに到来しますよう、お祈り申し上げます。」

01～08　誠心が起こした奇跡
09～12　父の仇討をし、死後に名を残した蘇来卿……①
13～16　宗家の仇討をし、恩赦を受けた秦女休……②
17～32　父を肉刑から免れしめた緹縈……③
33～56　父を処刑から免れしめた趙の渡し守の娘娟……④
57～64　文帝の治世に対する祝辞

第 9 句「関東有賢女」は、漢代「鼙舞歌」の一句（題目）をまるごと引用したものである。
曹植「精微篇」は、この第 9 句以下第 56 句「何況健少年」に至るまで、ひとつのテーマで貫かれている。本歌辞の大半を占めるこの部分こそ、漢代「鼙舞歌」を踏襲したところだと見られよう。

①蘇来卿については未詳。
彼女と同様、父や宗家の敵討ちをする女性の故事は、漢魏晋時代、特に雑伝類などに散見する[2]。

②秦女休については、魏の左延年に次の「秦女休行」（『楽府詩集』巻 61）がある。

01 始出上西門　　始めて上西門を出たところで、
02 遥望秦氏廬　　遥か彼方に秦氏の家を眺めやる。　＊a
03 秦氏有好女　　秦氏によき娘がいて、
04 自名為女休　　彼女は自ら女休と名乗っている。
05 休年十四五　　休は年のころ十四五歳で、
06 為宗行報讎　　宗家のために仇討をした。
07 左執白楊刃　　左手に白楊の刃を握り、
08 右拠宛魯矛　　右手に宛魯の矛を押さえて。　＊b
09 讎家便東南　　仇は東南に身を寄せ、
10 仆僵秦女休　　秦女休を倒そうとする。
11 女休西上山　　女休は西のかた山に上り、
12 上山四五里　　山に上ること四五里。
13 関吏呵問女休　　関所の番人が　厳しく女休を問い質せば、

[2] 下見隆雄『儒教社会と母性―母性の威力の観点でみる漢魏晋中国女性史』（研文出版、1994 年）の、特に p.353―421 を参照。

14 女休前置辞　　女休は前に進み出て返答する。
15 平生為燕王婦　　「その昔は燕王の妻でしたが、
16 於今為詔獄囚　　今は詔によって投獄された囚人です。
17 平生衣参差　　昔はあれこれと着飾っておりましたが、
18 当今無襟襦　　今は襟も襦袢もない有様です。　＊c
19 明知殺人当死　　人様を殺すことが死罪に当たることは十分に承知しております。
20 兄言怏怏　　兄は、鬱々と楽しまないことを言いますが、
21 弟言無道憂　　妹（自身）は、泣き言を口にすることはございません」と。
22 女休堅辞　　女休は心に決めた言葉をきっぱりと述べる。
23 為宗報讎　　「宗家のために仇討をし、
24 死不疑　　死ぬことは覚悟しております。
25 殺人都市中　　人を大都会の真ん中で殺したのですから、
26 徼我都巷西　　わたしを街角の西に捕らえてください」と。
27 丞卿羅東向坐　　役人たちは居並んで東に向かって坐り、　＊d
28 女休悽悽曳梏前　　女休は痛々しい有様で桎梏を引きずって進み出る。
29 両徒夾我　　二人の人夫がわれらが娘を両方から抑え込み、
30 持刀刀五尺餘　　刀を持つ、刀は五尺餘り。　＊e
31 刀未下　　刀がまだ振り下ろされていないとき、
32 朣朧撃鼓赦書下　　ドウドウと太鼓を打つ音が響き渡り、恩赦の勅書が下された。

＊a『文選』巻 29「古詩十九首」其十三：駆車上東門、遥望郭北墓。
＊b『史記』刺客列伝（荊軻）：臣左手把其袖、右手揕其匈、然則将軍之仇報而燕見陵之愧除矣。……軻既取図奏之、秦王発図、図窮而匕首見。因左手把秦王之袖、而右手持匕首揕之。
＊c『文選』巻 29「古詩十九首」其二：昔為倡家女、今為蕩子婦。
＊d『史記』項羽本紀：項王項伯、東嚮坐、亜父南嚮坐。亜父者、范増也。沛公北嚮坐、張良西嚮侍。
＊e『史記』刺客列伝（荊軻）：未至身、秦王驚、自引而起、袖絶。抜剣、剣長、操其室、時惶急、剣堅、故不可立抜。[3]

③緹縈については、班固の詠史詩[4]の中に次の一篇がある（『文選』巻 36 李善注に引く）。

01 三王德彌薄　　夏・殷・周三代の君主から、為政者の仁徳はだんだんと薄くなり、
02 惟後用肉刑　　そうして後世になると、人の身体を損傷する刑が用いられるようになった。

---

[3] 『史記』の記述の中に認められる通俗的口承文芸の片鱗については、宮崎市定「身振りと文学―史記成立についての一試論―」（『宮崎市定全集 5』岩波書店、1991 年。初出は『中国文学報』第 20 冊、1965 年 4 月）を参照。

[4] 班固の詠史詩は、『詩品』序に「質木無文」と評されている。詠史詩というジャンルは、漢代の宴席で語られていた歴史故事と、同じ場で享受されていた五言詩という詩型とが出会って誕生したと見られる。拙論「五言詠史詩の生成経緯」（『六朝学術学会報』第 18 集、2017 年）を参照されたい。

03 太倉令有罪　　前漢の太倉の令は、あることで罪に問われ、
04 就逮長安城　　囚われて、長安の街に護送されることとなった。
05 自恨身無子　　彼は自身に息子のいないことを自ら恨み、
06 困急獨煢煢　　追い詰められた気持ちで一人くよくよと憂いに沈む。
07 少女痛父言　　末の娘は、息子のいないことを恨む父の言葉に胸を傷めた。
08 死者不復生　　死んでしまったら、二度と生きることはできない。
09 上書詣北闕　　彼女は、父を救い出すべくお上に上書しようと宮城の北門に到り、
10 闕下歌鷄鳴　　宮闕の下で、「鷄鳴」を歌った[5]。
11 憂心摧折裂　　父の身を憂えるあまり、胸は砕けて張り裂けんばかり、
12 晨風激揚聲　　君主への拝謁が叶わぬ苦しみを託して、「晨風」（『詩』秦風）を絶唱した。
13 聖漢孝文帝　　聖なる漢王朝の孝文帝は、
14 惻然感至誠　　彼女のことを哀れに思し召しになり、その至誠の心に感じ入った。
15 百男何憤憤　　凡百の息子たちのなんと憤懣やる方ないことだろう。
16 不如一緹縈　　自分たちは、緹縈一人にも及ばないのだ。

曹植「精微篇」の第 30 句に「辨義在列図」と。この種の故事は、絵図を伴って伝えられたらしい。『漢書』藝文志、諸子略・儒家類「劉向所序六十七篇」の注記に、『列女伝頌図』とある。

図と伝と賛とが相俟って故事を語るこの様式は、後の唐代の変文に通じる可能性がある[6]。

④趙の渡し守の娘娟については、『列女伝』弁通伝「趙津女娟」に記事が見える。
その中に記された歌辞「河激」は、次のとおり『楚辞』九歌と同じ句型を取る。

01 升彼舸兮面観清　　かの大船に乗って清らかな水を目のあたりに眺めれば、
02 水揚波兮杳冥冥　　水は波を揚げ、底知れぬ深さを湛えている。
03 祷求福兮醉不醒　　殿の福を祈って、供えた酒を飲んだ父は酔いから醒めず、
04 誅将加兮妾心驚　　誅罰が今まさに加えられようとしたとき、私の胸はずきんと高鳴った。
05 罰既釈兮瀆乃清　　処罰からすっかり釈放されて、恥辱もこうして雪がれた。
06 妾持楫兮操其維　　私は楫（かい）を手にして纜（ともづな）を操る。
07 蛟龍助兮主将帰　　蛟龍が助けて、君主様はこれから凱旋する。
08 呼来櫂兮行勿疑　　ああ、櫂（大きなかい）を取り、まっすぐ前へ進まれますよう。

---

[5] 前漢・後漢を通じて、宮闕の下では「鷄鳴」が詠われた。これは、いわゆる「四面楚歌」の「楚歌」であり、魏王朝の「相和歌」十七曲中の一曲であったと推測することができる。拙著『漢代五言詩歌史の研究』（創文社、2013 年）p.322―324 を参照されたい。

[6] 楊公驥「変相・変・変文考論」（『唐代民歌考釈及変文考論』中華書局・東北師範大学文学院学術史文庫、2015 年に収載）p.315―362、鄭先彬『劉向《列女伝頌図》研究』（鳳凰出版社、2013 年）p.265―267 を参照。

この句型の歌謡は、漢代において実際に楽器の演奏を伴って歌われた[7]。
同じ句型の歌謡は、前掲の『史記』刺客列伝、同項羽本紀、同高祖本紀等にも見える。

曹植「精微篇」に詠じられた女性たちはいずれも、宗家や父の窮地を救った娘である。これは、儒教社会を成り立たせている秩序―親と子、男性と女性、長幼の序―をひっくり返すものだと言える[8]。
その表現には、口語的な要素の強い文芸作品とのつながりが顕著に見て取れる。
だとすれば、不甲斐ない父を救った勇敢な娘たちの物語は、庶民たちの間で好まれ、語り伝えられたものであったと見ることができるのではないか。
同系統と見られる文芸作品として、たとえば出征できない父の代わりに兵士となる娘を詠じた「木蘭詩」二首（『楽府詩集』巻 25）などがある。

儒教社会を支える秩序を逆転させる物語は、唐代の変文にも見出せる。たとえば幼い子どもが孔子の師となる「孔子項託相問書」、人間の男性が天女から助けを受ける「董永変文（董永行孝）」、胡の王が愛情深い人物として好意的に描かれる「王昭君変文」など。
これらの変文は、多く科白によって構成されている点、図絵を伴っていた点でも、漢代の宴席で上演されていたらしい物語に共通する。孔子と項託、董永の故事は、漢代画像石にも描かれている[9]。

## Ⅱ.「霊芝篇」（漢代「鼙舞歌・殿前生桂樹」に当たる）に詠じられた孝子たち

01 霊芝生玉池　　霊芝が玉づくりの池に生じ、
02 朱草被洛濱　　紅色の仙草が洛水の岸辺一面に茂っている。
03 栄華相晃燿　　草木の花々は互いに照り映えて、
04 光采曄若神　　光の綾が神々しいばかりに輝いている。
05 古時有虞舜　　太古の昔、虞舜というものがいて、
06 父母頑且嚚　　その父母は頑迷で、しかも口やかましかったけれども、
07 尽孝於田隴　　田畑で働いて孝養を尽くし、
08 烝烝不違仁　　せっせと親孝行に励んで仁に悖ることがなかった。……①

---

[7] 藤野岩友『巫系文学論（増補版）』（大学書房、1969 年。初版は 1951 年）所収「神舞劇文学」に指摘する。併せて前掲拙著（注 5）第二章第二節第三項を参照されたい。
[8] 下見隆雄『劉向『列女伝』の研究』（東海大学出版会、1989 年）p.76 に、「「弁通」篇に登場する女性達は、その発言の性格において、男性をしばしば凌駕し、甚だしきは、天下国家を論ずるに至ると評するも過言ではない……本来は男性が積極的に形成し発動せしめるべき社会的な問題意識を、かえって女性が具体化している……この領域にまで見識が至り、問題点の所在を明示し得る様な、明敏にして強烈な女性に対しても、十分対応し得る男性の意識の確立を、作者が期待しているということであろう」と論じられている。後に、同氏は前掲書（注 2）第八章において、こうした娘たちのふるまいを「本来は儒教社会で男性を保護して支える母性を発揮すべき女性なるが故に、その孝実践の根底には、母性的要素が浸透していると解釈すべきだ」（p.379）とし、「娘から父への母性発揮」と捉えなおしている。
[9] 漢代画像石に宴席風景と共に現れる歴史故事は、宴席で上演される文芸を図像化したものと見ることができる。拙論「漢代画像石と語り物文芸」（『中国文学論集』第 43 号、2014 年）を参照されたい。

09 伯瑜年七十　伯瑜は七十歳になっても、
10 采衣以娯親　あでやかな彩りの衣服を着て親を喜ばせ、
11 慈母笞不痛　慈母の笞うつのが痛くなくなったことにその老いを感じ、
12 歔欷涕沾巾　すすり泣いて涙が手拭いをぐっしょり濡らした。」……②
13 丁蘭少失母　丁蘭は幼少にして母を失い、
14 自傷蚤孤煢　早くに一人ぼっちとなってしまったことを自ら傷み、
15 刻木当厳親　木を刻んで両親に見立て、
16 朝夕致三牲　朝夕に牛・羊・豚の三種の供え物を捧げた。
17 暴子見陵侮　ところが、乱暴者に凌辱されて、
18 犯罪以亡形　刑罰を受けることを忘れて罪を犯した。
19 丈人為泣血　木彫りの家長は彼のために血の涙を流し、
20 免戻全其名　この奇跡によって丁蘭は罪を免れてその名誉を全うした。」……③
21 董永遭家貧　董永は家の貧窮という不運にめぐり合わせ、
22 父老財無遺　父は年老いて彼に残す財産もなかった。
23 挙仮以供養　そこで彼は借金をして供え物をし、
24 傭作致甘肥　小作人として働いて、よく肥えた美味なる肉を亡き父に届けた。
25 責家填門至　借金取りは門を埋めるほどにやってくる。
26 不知何用帰　いったい何をもって彼らに帰っていただこうか。
27 天霊感至徳　すると、天上の神霊が董永の至徳に感じ入り、
28 神女為秉機　天から下された神女が彼のために機織りをすることとなった。」……④
29 歳月不安居　歳月はひとところに留まってはくれないものだ。
30 烏乎我皇考　ああわが父よ。
31 生我既已晩　我に生を与えたのはとても遅かった上に、
32 棄我何其蚤　我を見捨てて逝去したのはなんと早かったことか。
33 蓼莪誰所興　「蓼莪」（『詩経』小雅）は、誰がこれを暗喩で詠じたのか、
34 念之令人老　この詩を繰り返し思えば、私はすっかり老け込んでしまう。
35 退詠南風詩　退居して南風の詩（『詩経』邶風「凱風」）を詠ずれば、
36 灑涙満褘抱　流れる涙がひざ掛けいっぱいに満ちる。」
37 乱曰　歌いおさめに曰く、
38 聖皇君四海　聖なる皇帝は天下四海に君臨し、
39 徳教朝夕宣　仁徳ある教令が朝夕に宣布される。
40 万国咸礼讓　万国はみな礼儀正しく讓りあい、
41 百姓家粛虔　百官は家々で慎み深く暮らしている。
42 庠序不失儀　学び舎では折り目正しく教育が行われ、
43 孝悌処中田　父母や目上の者によく仕えよとの教えが村中に根付いている。
44 戸有曾閔子　各戸に曹参や閔子騫のような孝行者がおり、
45 比屋皆仁賢　住人たちは軒を連ねてみな心優しき賢者である。
46 髫齔無夭歯　幼児に早逝する者はなく、

47 黄髪尽其年　　年配者はその天寿を全うする。
48 陛下三万歳　　陛下におかれては三万年の長寿であらせられますよう、
49 慈母亦復然　　慈母におかれてもまた同様であらせられますよう、祈念いたします。」

①虞舜が農耕によって孝養を尽くしたという記事は、『尚書』堯典、『史記』五帝本紀などには見えない一方[10]、次のような文献には見えている。

・『列女伝』賢明伝「周南之妻」：昔舜耕於歴山、……。非舜之事，而舜為之者，為養父母也。
・『焦氏易林』観之、観（観　観に之く）：「歴山之下、虞舜所処。躬耕致孝、名聞四海。
・武梁祠（山東省嘉祥県）画像石の榜題：帝舜名重華、耕於歴山、外養三年。[11]

②伯瑜の故事のうち、後半 2 句は『説苑』建本篇に、
前半 2 句は老莱子の故事として、師覚授『孝子伝』（『太平御覧』巻 413）に見える。
いずれの故事も、前掲の武梁祠画像石に刻まれている。

③丁蘭の「少失母」について、
前掲の武梁祠画像石には「丁蘭二親終歿、立木為父」云々[12]、
孫盛『逸人伝』（『初学記』巻 17）には「少喪考妣、不及供養、乃刻木為人、髣髴親形、事之若生、朝夕定省」と見える一方、
『法苑珠林』巻 49・忠孝篇に引くところは「年十五喪母、刻木作母事之、供養如生」と記す。

④董永の故事は、劉向『孝子図』（『太平御覧』巻 411）、干宝『搜神記』巻 1 などに記されているが、そこでは、彼が弔い供養したのは父に対してであったことが前面に出た記述となっている。
他方、「董永変文（董永行孝）」では、董永が葬って孝養を尽くしたのは父母に対してである。また、董永と天女との間に生まれた子の董仲が登場して、母を探して天上界まで至っている[13]。

こうした辞句や内容の異同は、故事が時代と共に累加・変化していったことを示しているのか、あるいは、もともと民間で語り伝えられていた故事を、各文献がそれぞれの価値観によってアレンジを加えつつ記した結果生じた差異なのか、それとも、その両方か。

---

[10] 金岡照光『敦煌の文学文献』（大東出版社、1990 年）所収「孝行譚―「舜子変」と「董永伝」」の「舜孝子伝の原型と構成要素」は、『史記』五帝本紀に見える舜の記事を腑分けし、「これらは帝堯、帝舜の禅譲と、直接関連なき、親子の間の物語である。青木博士（青木正児「堯舜伝説の構成」（『支那文学芸術考』弘文堂、1942 年所収）は、こうした物語と、歴山、河浜、雷沢等で農漁業に従事する話は、民間伝説を採用したものではないかと疑っておられる」と指摘する（p.496）。
[11] 瞿中溶『漢武梁祠画像考』（北京図書館出版社、2004 年）p.114、長廣敏雄『漢代画象の研究』（中央公論美術出版、1965 年）p.66 を参照。
[12] 瞿中溶前掲書 p.169、長廣敏雄前掲書 p.77、張道一『漢画故事』（重慶大学出版社、2006 年）p.124 を参照。
[13] 金岡照光前掲書（注 10）p.517―546、鄭振鐸著、高津孝・李光貞監訳『中国俗文学史（東方学術翻訳叢書）』（東方書店、2023 年）p.170―176 を参照。

曹植「霊芝篇」は、民間に伝承する孝子故事を取り込んだ歌辞である。
そこから窺える庶民の基盤的感情としての「孝」は、父性を中央に据える儒教のそれよりも、母なる存在の方に重心を置く傾向が認められると言えるかもしれない。

## Ⅲ.「聖皇篇」（漢代「鼙舞歌・章和二年中」に当たる）に流れる基盤的感情

本歌辞は、三公の進言により、諸王が皇帝から各藩国に赴くよう命ぜられたことを題材としている。これは、曹植自らの身に起きた出来事である以前に、後漢の章和二年（88）に起こった史実である。本歌辞を制作した当時の曹植の境遇を考え合わせると、「聖皇篇」は内容・表現ともに漢代「鼙舞歌・章和二年中」を踏襲するものであったと見られよう[14]。その別れの場面を詠じた終盤にいう。

41 祖道魏東門　　魏の都の東門に、道祖神を祭って別れの宴席を張れば、
42 涙下霑冠纓　　涙が流れ落ちて冠の紐をしとどに濡らす。
43 扳蓋因内顧　　車の蓋いを引き寄せて振り返り、
44 俛仰慕同生　　頭を垂れたり遠くを仰ぎ見たりして、血を分けた兄弟たちを恋い慕う。
45 行行将日莫　　どんどんと進みゆけば、日はまさに暮れようとするところ、
46 何時還闕庭　　いつになったら宮廷に戻ってこれようか。
47 車輪為裴回　　車輪はこの思いゆえに行きつ戻りつし、
48 四馬躊躇鳴　　四頭立ての馬はぐずぐずと足踏みをする。
49 路人尚酸鼻　　通りすがりの人でさえ悲痛の涙に襲われるのだ。
50 何況骨肉情　　まして、骨肉の情で結ばれた間柄ではなおさらだ。」

42「涙下霑冠纓」の類似表現として、
　たとえば古楽府「長歌行（岧岧山上亭）」（『楽府詩集』巻 30）に「泣下沾羅纓」と見える。
44「俛仰慕同生」の「俛仰」は、
　『文選』巻 29、蘇武「詩四首」其二に「俛仰内傷心、涙下不可揮」との用例がある。
45「行行将日莫」の「行行」は、
　『文選』巻 29、「古詩十九首」其一にいう「行行重行行、与君生別離」を意識するか。
49「路人」と 50「骨肉」との対比は、
　前掲の蘇武「詩四首」其一に「骨肉縁枝葉、結交亦相因。四海皆兄弟、誰為行路人」と見える。

こうした古詩・古楽府の類は、漢代の宴席を場として生成・展開してきた文芸である[15]。

43「扳蓋因内顧」の「内顧」は、
　『論語』郷党篇にいう「升車、必正立執綏。車中、不内顧、不疾言、不親指」を踏まえて反転させた、つまりは儒教的折り目正しさから逸脱した振る舞いをいう。

---

[14] 前掲の拙論（注 1）を参照されたい。
[15] このことについては、前掲の拙著（注 5）の全体を通して論じている。

中庸を打ち破る感情表現は、前掲の古詩・古楽府の基調を為すものであり、曹植「聖皇篇」は、そうした詩歌と基盤を共有していることが見て取れる。
同じ表現傾向は、詩歌以外のジャンル、特に後漢の宴席風景を詠じた作品には少なからず認められる。たとえば張衡の「舞賦」(『藝文類聚』巻 43)に「抗修袖以翳面兮、展清声而長歌。歌曰、驚雄逝兮孤雌翔、臨帰風兮思故郷」、同「南都賦」(『文選』巻 4) に「弾箏吹笙、更為新声。寡婦悲吟、鵑鶏哀鳴。坐者悽欷、蕩魂傷精」とあるように。

曹植「聖皇篇」は、振幅の大きい感情表現で「骨肉」の情を描く。
理よりも情、公的規範よりもより身近な人に光を当てるこうした姿勢は、漢代宴席文芸の直系であり、そうした場に集う人々が共有する基盤的感情に根差した表現であったと言えよう。

## 結びにかえて

曹植「鼙舞歌」は、内容・表現ともに漢代「鼙舞歌」を踏襲すると見られる。
「鼙舞歌」は、その発祥は未詳ながら、漢代にはすでに宴席で演じられていた（『宋書』楽志一)。
ならば、曹植「鼙舞歌」の中に、漢代の宴席に流れていた基盤的感情を読み取ることは可能だろう。

本発表で取り上げた曹植「聖皇篇」「霊芝篇」「精微篇」には、大きな振幅をもって詠じられる骨肉の情、民間伝承と基底を共有する孝子故事、父なる存在の窮地を救う娘たちの故事が活写されているのを見て取ることができた。総じてそこには、儒教的規範に依りながらも、それをひっくり返し、ずらしていく傾向が認められるように思う。

これらは、必ずしも上層階級の宴席に集う人々に限定された感情だとは言えない。なぜならば、漢代の宴席には、民間に出自を持つ多彩な文芸が流入していたからである[16]。
また、漢代宴席文芸に通底する基盤的感情は、必ずしも漢代に限定されるものだとも言えない。その中には、遠く古代に淵源を持ち、人々の感情世界の地下水脈を為しつつ、長く後代にまで伝わったものも少なからずあるという見通しが得られたからである。その全体像と詳細については待考としたい。

[16] たとえば、民間歌謡に出自を持つとされる楽府詩が、後漢時代には上層階級の宴席で行われるようになっていることについては、王運熙「漢代的俗楽和民歌」(『復旦学報』1955 年第 2 期。『楽府詩述論』上海古籍出版社、1996 年に収載)、小西昇「後漢に於ける楽府詩流行の状況について」(『文学研究』第 60 輯、1961 年。『漢代楽府・謝霊運詩論集』葦書房、1983 年に収載）を参照。